

「関西社会福祉学会・日本社会福祉学会関西地域ブロック
第40回若手研究者・院生情報交換会」報告

同志社大学大学院 社会学研究科 社会福祉学専攻
博士前期課程2年 佐々木 瞳

2017年9月1日(金)の午後、同志社大学寒梅館6階大会議室にて、関西社会福祉学会・日本社会福祉学会関西地域ブロック「第40回若手研究者・院生情報交換会」が開催された。「ソーシャルワークの理論と実践をつなぐ研究を目指して～社会福祉実践の現場にかかわる研究活動～」をテーマに、3名の発題者によるミニシンポジウムと、参加者全体でのクロストークを通して、社会福祉実践現場にかかわる研究活動の実際、その意義や可能性、また魅力、醍醐味などを学び、分かち合った。若手研究者や院生のほか、ベテランの教授や社会福祉学科の学部生も含め総勢45名(教職員21名、院生23名)という多数の参加により、にぎやかに活気あふれる会となった。

第1部のミニシンポジウムでは、実践現場とのかかわりを大切にしながら教育・研究活動に取り組む、永田祐先生(同志社大学)、森口弘美先生(京都府立大学)、空閑浩人先生(同志社大学)の3名による発題がなされた。まず永田先生より、「地域福祉現場にかかわる研究活動の経験から」を主題として、実践現場において実践者とともに取り組む「実践研究」について報告がなされた。続いて森口先生からは、「私にとっての実践・研究・方法論—当事者組織の現場にかかわる研究活動—」と題し、これまでの現場体験と研究の流れに沿って、「エピソード記述」という研究方法との出会いとその経験、また研究の上でのご自身の思いや葛藤などが語られた。最後に空閑先生から、「社会福祉施設の現場にかかわる研究活動の経験から」をテーマに、多くの書籍や、実践現場の人々の声からの引用を交えつつ、研究の中で大切にしている視点や考え方が述べられた。

3名の先生方の報告において、それぞれの研究におけるスタンスがとても印象的だった。実践現場の課題を実践者とともに研究し、研究としての成果よりも現場の「少しの変化」を大切にする。実践現場とのかかわりがあってこそ感じられることを大切に、研究として結論を出すよりも了解可能性を追求する。実践現場や教育現場を大切にするとともに自らが学び続ける謙虚さを忘れず、そこで感じるやりがいや魅力をもかみしめる。見習うべき点がたくさんあることは言うまでもないが、自分自身がどのようなスタンスで研究に取り組むかを考えることが必要であるということにも気付いた。

また、3名の先生方による報告に共通していたことは、研究の経緯や内容だけではなく、そこでの悩みや葛藤、そして思い、考えが語られたことであった。それらがあってこそ、今の先生方の研究スタイルや、研究における姿勢があるのだということが感じられた。研究というものに漠然とした期待がある一方で大きな不安も抱いていた私にとって、悩みや

葛藤と向き合いながらも思いを持ち続け、努力をし続けることで見えてくる、出来上がってくるものがあるのではないかということを感じさせられ、背中を押してもらったような気分にもなった。

第2部のクロストークでは、ソーシャルワークの専門性や研究の倫理に関することなど、社会福祉領域の中で常に考え続けるべきともいえる議論から、具体的な研究における現場の人々との距離感や信頼関係の築き方、また実践の中で得たものをどう研究にかみ合わせていくか、といった、今回のテーマならではの議論まで、活発に意見が交わされた。その内容はもちろん、参加者の皆さんの熱心さに、大きく刺激を受けた。

プログラム終了後には懇親会が開かれ、こちらにも29名の参加があった。参加者それぞれが情報や意見を交換しながら交流し、引き続き、実践や研究に関する話題が尽きず大変盛り上がった。

私は今回、初めて「若手研究者・院生情報交換会」に参加した。研究に関する知識や情報を得ること、他者の研究の内容に関心を広げること、さまざまな研究者と出会い刺激を受けること、そして、そうした中で自分の研究を見つめ直し、磨いていくこと、というように、とてもたくさんの意味をもつ場だと感じた。今後も、こうした機会が充実していくことを願っている。

